

美術部会

<県研究主題>

豊かに感じ取る力を高めることを重視し、生徒一人ひとりの資質や能力の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 河原林 薫 (湘南三浦地区)

<研究主題>

「美術科の可能性 美術科としての言語活動」評価の工夫・改善

1 提案内容

美術科としての言語活動とは何かということに焦点を当てた内容。今まで対話型の鑑賞の授業によって、作品を通して他者との交流を中心とした言語活動を中心におこなっていた。しかし、あえて鑑賞の授業でなく制作活動のなかから生まれてくる「言葉にならないことば」を扱うことで、美術科ならではの言語活動というものを改めて考えなおし、紹介した内容である。

(1) 授業実践「色と線で話そう」

鑑賞活動を中心に言語活動の充実を図ってきたなかで、美術の表現活動を通じたコミュニケーションの活動として、逗子市の教育研究会の研修により「臨床美術」というジャンルの活動の紹介を受ける。もともと「臨床美術」とは、創作活動を行うことにより脳が活性化し、認知症の症状が改善されることなどを目的とした治療法のひとつであるが、その創作活動の一つに今回の授業実践の参考となった、オイルパステル（クレヨン）ワークがあった。

この活動は、2人で交代に1枚の色面構成をおこなうもので、交互に作業するなかで、「相手はどんな線を引くのか」「私の線や色にどんな反応をするか」といった言葉にならないコミュニケーションが生まれる。相手が塗る線や色をみつめ相手の思考を考えながら、自分の気持ちも線や色で表していくという活動をくり返しながら共感や反発、譲歩、融合といったさまざまなやりとりが生まれてくる。

この取り組みを美術科としての言語活動の在り方を模索する上での一つの可能性として、取り入れてみた。

① オイルパステル（クレヨン）の扱いに慣れる（1時間目）

- ・縦の線、寝かせた線、ぼかす、削る、重ねる、混ぜるなど状態を指示した様々な方法を試す。※重色などは、ベビーパウダーをのせてこすって見たりした参考作品を用意

② 「線と色で話そう」（2時間目）

- ・2人一組で、正方形の板目紙にジャンケンで先、後をきめて、先生から指示された言葉に反応して線を引く。お互いが3本ずつ引いた所で分けられた空間にオイルパステルで色を塗り始める。
- ・制作中は、お互いの行動の思いを読み取るため、交互に黙って制作を続ける。
- ・できあがった作品の上下を決めてサインを書く。
- ・完成した作品を壁面に掲示し鑑賞する。それぞれの作品から受ける「感じ」を言葉にして、ふせんを絵のそばに貼り、お互いに鑑賞を深める。

(2) 成果と課題

○成果

- ・オイルパステルの魅力と可能性を学習でき、発想が苦手な生徒や、支援級の交流の生徒にとっても充実感・達成感のある題材である。
- ・生徒の感想からも、コミュニケーションにかかわる記述や、共通事項、他者理解などに関わる記述が見られ、新しい視点での言語活動の充実もはかれた。
- ・道徳教育との関連においては、自己や他者への理解・尊重、自己肯定感の育成、コミュニケ

ーション力の育成などにつながるなど、美術科の枠をこえて発展できる可能性がある題材である。

○課題

- ・評価場面を多く盛り込みすぎた。
- ・2時間題材として取り組んだが、3時間扱いにすれば更に言語活動に深まりがでた。

2 協議内容

- ・スモールステップによる学習の積み重ねがとても良いと感じた。
- ・非言語活動の中で作品化する難しさを感じた。
- ・小学校の造形あそび的な取り組みで、活動を通して子ども達の成長が見ることができる。また、2年生でこの活動をおこなうことは共通事項の内容を含めてとても良い活動であると感じた。
- ・発展した技法が子ども達から生まれたか。
→グラデーションが意外だった。透明感のあるサイダーの色を作り出した生徒もいた。塗るか混ぜるかの単純な作業だが、2人でおこなうことは意外な色彩の組み合わせがあり発展できた。
- ・1年生で色彩の基本を学習しているが、今回の制作の振り返りの中で色彩に関する言葉は出てきたか。
→補色とか、涼しい色で、空の青など言葉が出てきた。今後更に引き出せる用に工夫したい。
- ・相手の考えた線や色に対する思いやり、重ねられた線や色に対する振り返る時間はあったか。
→時間が足りずに出来なかった。最後に会話をする場面を（1時間）作らなければならないと感じた。

3 まとめ

- ・言葉を介さない非言語のコミュニケーション活動を通して、相互に意識を高めて制作することの面白さ、偶然性の生む面白さが良く、無理に作品を完成させるのではなく表現を楽しむ題材である。共通事項の中で、形、色彩、それらのもたらす感情などについて、活動を通して学ばせることは、なかなか難しいが題材としては自然な流れのなかでも必然性を持たせて、実践されていた。

提案2

提案者 長谷川 聡 先生（横浜地区）

<研究主題>

指導と評価の一体化を図る授業実践～自分らしく表現主題を追求する子どもをはぐくむ～

1 提案内容

「指導と評価の一体化を図る授業実践」は、横浜地区のテーマでもある。研究を通し、次のように考えた。この授業を設計する際、「何を指導するのか」「何を身につけさせるのか」「自分が何をしていくのか」ということを考え、その授業を通して「何が身についたのか」子どもも指導者も実感を伴ってわかるのが、指導と評価の一体化なのではと考えた。

また、自分らしく表現主題を追求する子どもをはぐくむという視点で、生徒の現状を見つめ、教師の願いを次のようにもった。

1年生最後の課題では、自由に制作する課題で自分の発想に少しずつ自信をもって表現していた。2年生でも、その勢いを止めることなく発想の可能性を広げてもらいたい。また立体的に表す方法も身につけてもらいたい。

そこで、今回提案した「お面から自分を見つめて」～2つの対照的な言葉をお面に表現して～

という授業を設計した。

(1) 授業実践の例 (計9時間)

発想 (3時間) 画面の中に二つの対照的な言葉をたくさん思いつかせることで発想を促す

成形 (2時間) 型に紙粘土をのせ、形を作りながら立体制作

立ち止り (1時間) 自分が何を表そうとしているのか振り返る時間。自分の選んだ言葉とそれを表す言葉と形について改めて考えさせ、着彩計画を立てさせる

着彩 (2時間) 自分の主題にあったより効果的な方法で表現させる

鑑賞 (1時間) 実物投影機で作品を映し出ししながら作品について発表をする。

授業開始時に評価規準を示し、おおむね満足の状況・それ以外の状況についても説明をしてから授業をスタートさせたこともあり、子どもたちは目標をもって意欲的に活動に取り組むことができた。

(2) 成果と課題

この課題に取り組むことで次のような生徒の成長が見られたことが成果である。

- ・自分の選んだ言葉について深く考えることで、心の中の深い自分の考えがわかった。
- ・深く考え、頭の中に思い描いた形や色を作品に取り入れ、より納得のできる表現ができたことを通して工夫することの大切さがわかった。
- ・さらに表現を工夫するために途中で振り返ることの大切さがわかった。
- ・自分の主題を追求して制作を進める姿勢ができた。

課題としては次のことがあげられる。

- ・発想を見取る際の評価規準であいまいな部分があり、今後子どもたちの評価を平等に評価しあげられよう、しっかりと評価計画を立てる必要がある。
- ・ワークシートに実線がかいてあるのでそれにとらわれる生徒がいた。より自由な発想を引き出すためのプリントの形式をさらに検討する必要がある。
- ・個人個人の理解の差でプリントに記入された内容が異なったので、口頭の説明だけではなく、その時間にやるべきことが確認できるような、そんな分かりやすいプリントの必要性を感じた。

2 協議内容 (質問と回答)

- ・自他の内面に興味をもって表現する際、導入で対照的な言葉を出す際、そこに自分の思いを入れるのが難しく、心の内面に届かないこともあったのではないかと。
- アンパンとバイキンマンと初め発想で出した生徒は、アンパンマンから平和な世の中を表したいと変容していった。
- ・展開の中で、立ち止りの時間をとったことの意義が大きい。質問は、関心意欲態度の評価をなぜ鑑賞でみとめるのか。
- 発表者の話をしっかり聴きとろうしている姿を評価規準にいれたので。
- ・冊子P10のB評価は聞き取りであって、P2の評価規準が先生の身につけさせたい力だったのでではないか。
- 指摘の通りである。
- ・この題材は主題を見出す課題なので、お面から自分を見つめる方法を考える。今回は言葉から表現を探っているところがあるように思う。
- たくさん言葉をあげた中から、なぜ自分がその言葉を選んだか立ち止ったことで分析して、自分をみつめ、気づいてもらいたかった。

3 まとめ

真摯な態度で研究に取り組み、評価規準の一つ一つの言葉の裏側に横浜の先生方の取り組みが感じられる。また指導する評価規準は教師の願う姿であり、指導者に返ってくるものである。評

価はジャッジではない。また、発想を丁寧に取り組みさせていたが、見取るのは難しいものである。

今回の提案の「お面から自分を見つめて」というタイトルと、副題の～2つの対照的な言葉をお面に表現して～に隔たりを感じた。子どもにとってお面はどのようなものがあるのか。自分とお面との二面性か、二次元的なものなのか。重なりがあるものではないのか。午前中の発表は言葉では説明できないことの発表であった。その言葉にならない表現とミックスされた授業であったらさらによかったと思う。今後も授業デザインを考え工夫・改善していただきたい。

◇研究協議の柱に即した協議（グループ協議）

- A 美術科としての言語化をとらえ、身につけたい力を明確化することが大切。作品自体のとらえは、幅を広げていくことが大切。
- B スモールステップで発想を行うことで表現に広がりが出た。それは感じ取る力の育みにつながっていた。
- C 確かな言語活動は何であろう。それは、子どもの力を育むツールの一つではないか。教師の言語力が大事である。「心の二面性」のように選んだ言葉一つでできるものが変わってくる。美術のもつ力、形や色や言語も楽しさもぶれないようにするべきではないか。
- D 言葉や文字を使うだけが言語活動ではないであろう。思いを表すのも言語活動ではないか。造形言語が美術なのでは？抽象作品制作の際、言葉を交わさずに色や線を扱う中で、造形言語が交わされたのではないか。制作後、振り返りがあるとよかった。
- E 意欲を高めるように授業展開をしていくと豊かな表現を育む。自分の表現の確認をさせる時間をとったことで、ぶれずに制作ができたのではないか。
- F スモールステップの設定は苦手意識をもっている生徒に楽しい思いをもたすことができる。様々な場面での言語活動が考えられるが、河原井先生の提案が新鮮であった。教えたいことがぶれない3年間の計画が必要である。
- G 提案1ではオイルパステルの作品が参考になった。提案2では、評価規準が参考になった。自分を見つめるテーマであるならお面の課題でなくてもよかったのではないか。
- H 事例の紹介をしあった。ものづくりの視点で教材研究することが大切だと確認し合った。

まとめ

- 学習指導要領が改訂され2年目となるが、もう一度ここで指導要領の再確認をして欲しい。同じ『器の制作』を扱う題材であっても、指導のねらいA表現（1）（2）によって育成する資質や能力が異なってくる。今回の発表を聞きながら、各学校に持ち帰り、3年間の子どもの成長を考え、指導計画をもう一度見直すことが大切である。